

宝塚歌劇団と女子養成

—「清く正しく美しく」にみる女子教育—

永田美江子

(平安女学院大学国際観光学部)

はじめに

宝塚歌劇を人は「夢の世界」という。しかし、この表現は、宝塚を語る場合にはあまりにもありふれた形容だ。筆者は宝塚グランドロマン「ベルサイユのばら—アンドレとオスカル編—」を見た日の衝撃と感動は、それからの幾年月を越えて忘れることができない。宝塚歌劇に持つ形容詞は「魂をわしづかみにされるくらいの「衝撃」と「感動」なのだ。劇画で読んでいた男装の麗人オスカルが舞台という現実の空間で動いている…。密かに心をよせるフェルゼンのために真っ白なドレスを身にまとい、ダンスをしている。バステューで銃弾に倒れたオスカルを、アンドレがガラスの馬車で迎えにきた。ふたりは天国へと旅立つ。そして“愛あればこそ”のメロディー。感動に打ち震え、数日間は夢の世界をさまよっていたことを思い出す。さらに宝塚歌劇「ベルサイユのばら」のもうひとつのお楽しみ、私たちの心を捉えて離さないのは、オスカルとアンドレを見送ったあとのグランドフィナーレだ。ふたりが視界から消え、心に一抹の安堵と寂しさを余韻として味わっていると、一転、羽とリボンときらきらのロココの妖精が登場する。心はふたたび華麗な「ベルばらの世界」へ連れ戻され舞台にくぎ付けになる。極めつけはオスカルとアンドレのボレロ、これで打ちのめされた。後はしばし、脳内にバラと羽根が飛び交い、“愛あればこそ”がリフレイン。ベルサイユのばらの不朽の主題歌“愛あればこそ”は、多くの宝塚スターがその舞台上で歌っている。どのスターもそれぞれにカラーがあって素敵なのだが、個人的には安奈淳の少し憂いをおびた甘い“愛あればこそ”の歌声が大好きだ。

人々を別世界へといざなう宝塚歌劇に関する著書や言説 (cf. 中本 2009; 桐生 2014) は多い、宝塚歌劇とそれを取り巻く事象を学術的な研究対象とした先行研究 (cf. 川崎 2005; 津金澤 2014) や、宝塚ファンを社会学的に分析した研究 (宮本 2011) もあり、今後も宝塚研究は増えていくことであろう。しかし、本稿で取り上げたいのは、「清く正しく美しく」と女子教育である。躰や礼儀に厳しいといわれる宝塚音楽学校や歌劇団の生徒が、いかにしてこのモットーを内面化し、自らの人生や芸に役立てたかについて考えたい。一方で、「清く正しく美しい」タカラジェンヌの中でも、退団後も芸能界で活躍している元トップスターたちは、宝塚音楽学校や歌劇団の中では、どちらかという型破りなタイプが多く、元トップスターの回想にはそのような型にはまらなかったエピソードが書かれている。しかし、そんな彼女たちもどんな形であれ、一度は「清く正しく美しく」の理念をいやおうでも身近に感じる時期があったのだ。その時期を過ごしたからこそみえてきたこと、理解できたことがあったのではないかと考えるのは間違っているだろうか。幼い頃から今も変わらず宝塚歌劇が好き過ぎてどうしようもない、自称「宝塚オタク」の筆者にとって、宝塚歌劇やその生徒を対象とした物を書くことは、神をも恐れぬ、不届きな行為であることは承知の上である。しかし、「清く正しく美しく」をモットーとした宝塚の女子教育や生徒たちの生き方が、筆者が身をおく女子大学でのホスピタリティ教育や女子教育、そこで学ぶ女子学生に必要な何かをもたらす糸口があるのではないかという思いを持っている。本稿はその導入である。

1 宝塚歌劇団「生徒」という呼称

2014年に宝塚歌劇団は創立100周年を迎えた。「花・月・雪・星・宙」の5組と「専科」から構成されており、

女性だけが入団を許されている。所属する生徒の数は、歌劇団の養成学校である宝塚音楽学校の生徒も含むと約 500 名といわれている。兵庫県の宝塚と東京に大劇場を持ち、宝塚ファンでなくとも認知度の高い「ベルサイユのばら」や、「エリザベート」などの代表作がある。一年を通して、絶え間なく公演がおこなわれており、その公演作品はトップスターの個性を活かしたものが多く、トップスター至上主義である。

このような世界でも珍しいといわれる女性だけの歌劇団が生まれたのは、今を遡ること 100 年前の阪神間は武庫川のほとりの宝塚温泉というささやかな温泉場である。“稀代の経営者”といわれた阪急電鉄の小林一三が、箕面有馬電気軌道（現、阪急宝塚線）に乗客を誘致する目的で建てた娯楽場は、時の営みの中で多くの女優、歌手、果ては政治の世界にまで進出する女性を輩出した。日本の近代化 100 年の中でこんなにも多様な女性を育成した教育機関は他に類をみないのではないだろうか。この宝塚歌劇団および宝塚音楽学校の教育は、前述の小林一三が掲げた“清く正しく美しく”という教育理念のもとにおこなわれ、100 年のときを経てなお、健在である。

ここで注目したいのは、宝塚歌劇団は現在も学校制度の名残を残し、劇団員は「生徒」と呼ばれることである。宝塚音楽学校を卒業し、4 月に初舞台を踏んだ生徒は研究科 1 年といわれ、研究科 2 年 3 年と学年が上がる。研究科 7 年までは名実共に「生徒」である。研究科 8 年をむかえるとその内情が異なってくる。「生徒」という呼び方は変わらないものの、劇団側と結ぶ雇用契約がそれまでと異なる。研究科 8 年以降も、退団するまで「歌劇団の生徒」は「生徒」と呼ばれるが、その雇用契約は「タレント契約」となるのである。¹研究科 8 年目からは、実質的に生徒ではないのだが、呼び名だけが「生徒」と呼ばれ、「生徒」が退団してタカラジェンヌでなくなるその日まで、「宝塚歌劇団の生徒」なのである。また、トップスターを頂点として実力の世界ではあるが、反面、年齢に関わらず一年でも早く入団したものが上の年功序列の世界でもある。

このようなシステムの中で、「生徒」たちはたとえトップスターであったとしても、「宝塚歌劇団の生徒」という名のもとに学校制度の管理と、芸能界の実力主義を行き来している。「タレント」として実力をつけ、人気を博したとしても、「生徒」という名の下に、「清く正しく美しく」の理念を常に念頭におかなければいけないという、歌劇団の人事マネジメントのやり方と考えられないこともない。歴代のトップスターたちも、在籍中には語れないような逸話を、退団後に語ることがある。今や女優として大活躍の黒木瞳について、黒木と同様に芸能界で活躍している大地真央は、「自分の相手役に大抜擢された舞台稽古の初日に、娘役の装いの代名詞フレアスカートではなく、タイトスカートをはいて、稽古場にやってきた」²と語る。麻美れいも「よく遊び、よく食べて、よく怒られました。演劇の授業中、声を発したことがなかった。自立、責任感を教わった」³と宝塚音楽学校時代を回顧している。このような在籍中から光彩を放っていたスターたちの語りは、型にはまらないことが多く、そこから「清く正しく美しく」の理念を感じとることは少ない。しかし、当たり前とはいえ、これらのトップスターたちから宝塚歌劇団のことを批判的にみているような言葉がでてくることはない。それは「宝塚歌劇団の生徒」という名称が影響しているのか学校を卒業した卒業生が、学校時代を振り返って当時を語るといったある種の郷愁のようなものが感じられる。

2 「清く正しく美しく」の体現者

次に、宝塚歌劇団 100 年の中で「清く正しく美しく」を内面化したスターについて触れたい。「宝塚の至宝」とよばれた春日野八千代は、宝塚歌劇団の生徒の心得を「タカラジェンヌの心得は品格、舞台でのお行儀のよさ、謙虚さ」（2012. 8. 30 朝日新聞）と評した。その春日野八千代について宝塚きっての日本舞踊の名手で、長く歌劇団に在籍していた松本悠里はこう語っている。少し長くなるが全文を掲載したい。「春日野先生は『宝塚の舞台は品と格が大事』という言葉、身をもってお示し下さった。『品と格』口で言うのは易しいですが、そ

¹ 入団 8 年目から一年ごとに更新する契約になる。このあたりは宮本（2011）に詳しく書かれている。

² 『宝塚歌劇華麗なる 100 年』（朝日新聞出版:2014, 151）

³ 上掲書, 125

れが身につく、舞台上で出すには日常が大切。宝塚はスターさんはスターさんとして大切にされるけれど、上下級生の序列、規律がしっかりしている。だから家庭的であり、品格が生まれるのだと思います。『舞台上での行儀の良さ』『謙虚さ』も春日野先生がおっしゃった心得。この先何年も受け継がれていくよう、私たち生徒が努力しなければと思っています」（朝日新聞夕刊 2012, 11, 24）と結んでいる。その春日野が 2012 年 8 月に逝去した際に、元雪組トップスターであった朝海ひかる（2002～06 年トップ在籍）は、「下級生にも、笑顔で『おはよう』と声をかけてくださるのが楽しみでした」（朝日新聞夕刊 2012, 10, 27）と春日野八千代のホスピタリティ精神にふれている。「白バラのプリンス」ともいわれ、生涯独身で宝塚歌劇に人生をささげた彼女はまさに、「清く正しく美しく」を体現した宝塚スターだったといえる。

宝塚のスターや生徒には、その舞台人生の最後に必ず退団のふた文字がついているが、前述の春日野八千代は退団のない稀有の存在であった。それは彼女の存在、芸風、価値観が「清く正しく美しく」に合致していたからにはほかならなかつたのであろう。春日野にあたえられていた宝塚歌劇団理事の肩書きは、歌劇団が認めた宝塚歌劇の体現者に送られた名称と考えることはできないだろうか。興味深いのは、2002 年に春日野八千代に続くような存在になるようにと歌劇団に請われて、歌劇団の理事に就任した専科のトップスター轟悠の存在だ。轟悠の男役ぶりには定評があり、「風と共に去りぬ」のレット・バトラーや「ノバ・ボサ・ノバ」のソールなど男役のダンディズムがある。そんな舞台上の轟悠に求道者のようなストイックさを見るのはいい過ぎだろうか。轟悠は春日野八千代の後継者として、これからも宝塚歌劇団を引っ張っていく存在だが、彼女にとっての「清く正しく美しく」が、どのようなものなのかをこれから注目していきたい。

3 「清く正しく美しく」と自己啓発

春日野八千代や轟悠のような例はまれで、「生徒」は必ず退団する。「生徒」たちの退団後の人生は、結婚や起業、芸能界入りなど多様であるが、在籍中の「生徒」は、各組にたったひとりしかいないトップスターを目指す。その過程は過酷で、運と実力とある種の何かが必要な世界だ。トップスターを目指す生徒たちの競争を、中本は「年功序列と成果主義のダブルスタンダードが絶妙な形でミックスされた戦い」といい、その戦いに勝ち抜いた者が「組という組織（株式会社）のトップスター（社長）になれる」と述べている（中本 2009）。その一握りの階層に上り詰めた、元宙組トップスターで現在は女優として活躍をしている貴城けいは、宝塚という女の世界だけのモットーであった「清く正しく美しく」を自己啓発に転用したといえよう。彼女は在籍中の経験をもとに、『宝塚式「ブスの 25 箇条」に学ぶ「美人」養成講座』という著書（貴城 2012）を出版している。この本の帯には、「ビジネス、就活、恋愛にも役立つ自分磨きの方法、教えます！」と書かれており、「清く正しく美しく」の教えが「男性にも参考になる」「就活で役立った」など読者の声が続く。その内容は、宝塚の理念を貴城流に自己啓発として転換したものだ。

貴城は、宝塚歌劇団では「清く正しく美しく」のモットーに恥じぬ、美しく輝く舞台人になる条件として、マナーの域をこえたようなたくさんの決まりごと（学校の廊下は 1 列になって歩く。角は直角に曲がるなど⁴）があると語る。そして、「清く正しく美しく」をさらに、具体的な行動・考え方に落とし込んだものとして『宝塚式「ブスの 25 箇条」』をあげ、解釈を加えている。以下に『宝塚式「ブスの 25 箇条」』をあげる。

⁴貴城けい『宝塚式「ブスの 25 箇条」に学ぶ「美人」養成講座』（講談社：2012,7）

表1 「宝塚式ブスの25 箇条」一覧

1	笑顔がない
2	お礼をいわない
3	おいしいと言わない
4	目が輝いていない
5	精気がない
6	いつも口がへの字の形をしている
7	自信がない
8	希望や信念がない
9	自分がブスであることを知らない
10	声が小さくイジケている
11	自分が最も正しいと信じ込んでいる
12	グチをこぼす
13	他人をうらやむ
14	責任転嫁がうまい
15	いつも周囲が悪いと思っている
16	他人にシットする
17	他人につくさない
18	他人を信じない
19	謙虚さがなくゴウマンである
20	人のアドバイスや忠告を受け入れない
21	なんでもないことにキズつく
22	悲観的に物事を考える
23	問題意識を持っていない
24	存在自体が周囲を暗くする
25	人生においても仕事においても意欲がない

(貴城けい, 2012『宝塚式「ブスの25 箇条」に学ぶ「美人」養成講座』より筆者作成)

この25 箇条は、「外見に関すること」と「内面に関すること」にわかれる。「外見に関すること」は「1. 笑顔がない」「2. お礼をいわない」「3. おいしいと言わない」「4. 目が輝いていない」「5. 精気がない」「6. いつも口をへの字にしている」の6 箇条、それ以外の19 箇条は「内面に関すること」で、個人の心持ちである。これらの項目をみると巷にあふれる自己啓発本に書かれているものと大差はない。そこで注目に値するのが、その内容はもちろん重要だが、書き手がだれであったかということだ。文化社会学的に自己啓発本を分析した牧野智和(2012)は、「自己をめぐる機能とは、諸職業集団や人物、すなわち諸主体が有する能力の問題としてよりも、諸職業集団や人物の占めることのできる「主体位置(Lacau and Mouffe 1985=1992)の問題として考えるべき」⁵と述べている。これは自己啓発(自分磨き)を語ることができるのは、自分を磨いているもしくは磨ける能力を持ちえていると社会的に認められている人々ということになる。貴城けいも、語る内容もさることながら、宝塚歌劇団元トップスターが語る自己啓発として受け入れられたということになる。

このことは、筆者が関わる女子大学の教育においても興味深い。筆者が勤務するのは女子大学の国際観光学部という学部で、入学してくる学生の大半は、観光産業従事者を目指している。とりわけ在籍する女子学生たちは、世間一般で華やかな職種とみなされている仕事、キャビンアテンダントやブライダルプランナー、ホテルウーマンになることを夢みている。それらの学生たちは、学部で展開している授業カリキュラム中で、ホスピタリティやマナーを学ぶ科目に関心を持っている。特に人気のある科目は「エアライン概論」「ブライダル入門演習」「ブライダル概論」「ホテル概論」であるが、これらの科目は、その名前からもわかるように、キャビンアテンダント、ブライダルプランナー、ホテルウーマンを目指すための科目群である。学生による受講希望

⁵ 牧野智和『自己啓発の時代「自己」の文化社会学的探究』(勁草書房:2012, 179)

からは、これらの科目の評判は空港での実習や模擬結婚式といったイベントだけでなく、元客室乗務員やブライダルプランナーなど彼女たちが「輝いている女性」とみなす人間に教授されることに依拠しており、内容はさることながら、だれから教授されるかが強い影響力を持つ。

表2 「ブライダル・ホテル・エアライン関連科目名および概要」(2013年度シラバスより筆者作成)

		科目名	必須・選択	選択年	学習・講義の概要
専門科目	演習科目	ブライダル入門演習	選択科目	1年次	ブライダル衣装・ブライダルで使用する装花・写真・招待状などについて、見学や実習を通して学ぶ。またブライダルコーディネーター(プランナー)の仕事内容や、婚礼の構成・進め方を学習する。さらに海外の式や披露宴を各自で調べ発表する演習を通じ、関連分野についての幅広い視野と知識の習得を目指す。
	専門展開科目	ブライダル概論	選択科目	2年次	ブライダルの歴史や文化、婚礼そのものの考え方の変化、ウエディング関連商製品の歴史やトレンドを学ぶ。ウエディング業界の動向や挙式のトレンド、プランナーの就労状況などの分析をおこなう。模擬結婚式の体験や自身での婚礼の企画提案をすることにより挙式の実行の仕方、婚礼企画の立て方、かかる費用などについての理解を深める。
		ホテル実務概論	選択科目	2年次	ホスピタリティ産業の中心的役割を担うホテルの歴史や、業務形態・内容を学ぶ。ホテル会社の業務組織と業務内容、求められるホスピタリティについての理解をはかる。また一流ホテルや旅館の施設やサービスを見学し、その特徴を考える。これからのホテル会社のありかた、ホテル業従事者に必要な能力などについても考察を深める。
		エアライン概論	選択科目	3年次	エアラインビジネスの仕組みや機能を学習し、空港や航空会社関連での現地授業をおこなう。同時にサービススタッフに必須とされる知識やマナーについて、ゲストを招聘し、現場の声を聞く。

おわりに

本稿では、宝塚歌劇団の教育理念「清く正しく美しく」に着目して、今の女子教育につながるヒントはないかという筆者の問題意識を書きとめてきた。その発端は、女子教育、特に女子だけに特化した教育は過渡期にきているのではないかという思いからである。筆者の勤務する女子大学においても、教養から実学指向といった社会情勢に即した形で、その教育内容を英語、良妻賢母教育から観光ホスピタリティ教育へと移行させている。そこには様々な思惑が交錯しているが、女子学生たちに焦点を絞れば、学生たちは筆者が実施しているマナーやホスピタリティ教育に対し、ある種のジェンダー規範を嗅ぎ取り、それを特定の女性像に結び付け、その女性像と自身との遠近で講義の意義を理解し、苦手意識・反発心あるいは関心を抱いている姿がみられる。現代の女子学生たちは個人化する社会の中で、その価値観をますます多様化させており、良妻賢母型女子教育と企業が求める社会人基礎力とのはざままで考案された教育の手法では、学生たちが社会を女子としてどう生き抜きたいかをめぐるスキルと考え方の多様性に追いついていない。一方で、宝塚歌劇団のような女性だけの世界で「清く正しく美しく」というジェンダー規範を内包した言葉を、宝塚歌劇団の「生徒」たちは軽やかに受け止め、各人の人生に向かっていく。このあたりになにかヒントがあるのではないだろうか。「清く正しく美しく」の理念と宝塚歌劇団の「生徒」個人の生き方から、女性の自立を創造していく教育につながる一つの可能性を見出すことはできないだろうか。さらに検討していきたい。

【参考文献】

- 朝日新聞、2014、『『華麗なる宝塚 100年』朝日新聞出版
 上野千鶴子、2008、『『女縁』を生きた女たち』岩波書店
 貴城けい、2012、『宝塚式「ブスの25箇条」に学ぶ「美人」養成講座』講談社
 桐生のぼる、2014、『タカラヅカ 100年の「あるある」に学ぶ組織論なぜ、下級生は廊下を直角に歩くのか?』ペンコム
 津金澤聰廣・田畑きよ子・名取千里、2014、『タカラヅカという夢』青弓社
 中本千晶、2009、『なぜ宝塚歌劇に客は押し寄せるのか 不景気も吹き飛ばすタカラヅカの魅力』小学館
 牧野智和、2012、『自己啓発の時代「自己」の文化社会学的探究』勁草書房
 宮本直美、2011、『宝塚ファンの社会学 スターは劇場の外で作られる』青弓社